

ISSN 2188-0638

The Fulbrighter

in

Nagoya

No.31

February 2022

Nagoya Fulbright Association

The Fulbrighter in Nagoya No.31

目 次

1. 卷頭言 塚田守

2. 講演

「ワークライフ・インテグレーション：キャリア開発の一考察」

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部教授
中 村 艷 子

3. 会務報告

総会

会則

役員名簿

1 卷頭言

2020年3月ごろから2022年の現在まで続いているコロナ禍のために、2020～2021年度の総会および講演会もオンラインになってしまいました。

総会および講演会の状況について報告いたします。総会には12名の参加があり、昨年度の活動などを説明したうえで、次年度の同窓会の活動について話し合いました。フルブライターの留学体験などについて、聞き取り調査をして、社会に発信するというプロジェクトについても話されました。今後同窓会として、社会に発信する活動もすべきではないかという指摘もありました。

以前にもそのような指摘を受けておりましたので、今回、講演者としてお願いした同志社大学教授の中村艶子先生には、学生に対して、留学を促すような講演をしていただきました。今回は、会員だけの講演会ではなく、大学生たちにも参加してもらいました。Zoomの時のスクリーンショットにありますように、40人ほどの参加があり、会員だけでなく、学生たちからもコメント、質問もあり、いつもとは違った講演会になりました。

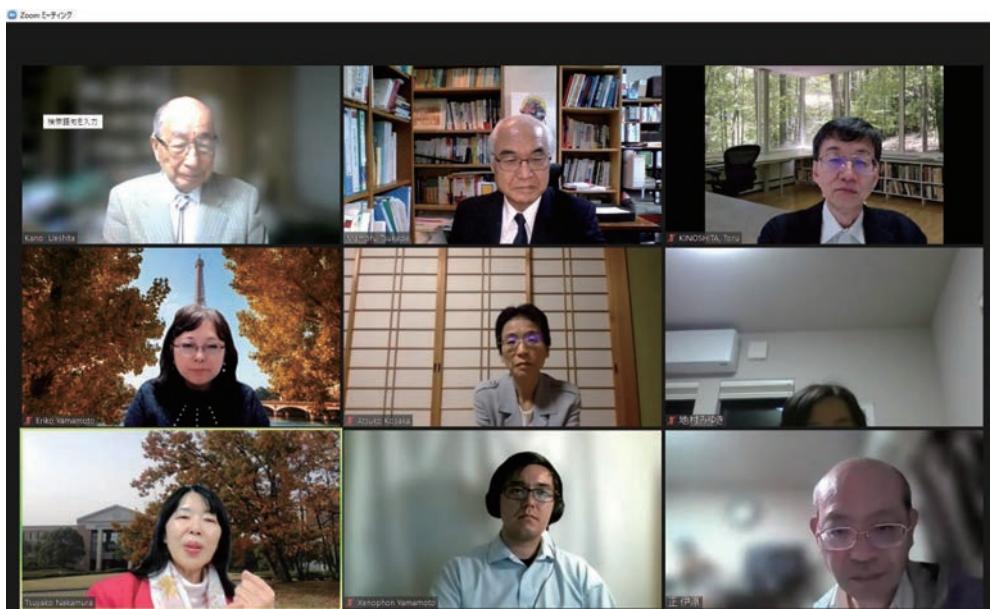
中村先生の講演会についての学生たちからのフィードバックも講演内容の後に追加されています。それを読んでいただければわかりますように、中村先生の講演は学生たちには相当のインパクトのあるものがありました。また、個人的には、私自身の留学体験などを思い出すものになりました。

名古屋フルブライト・アソシエーション
会長兼事務局長
塚田 守

講演会 名古屋フルブライト・アソシエーション主催 2021年11月12日
(於 梶山女学園大学・オンライン講演会)

「ワークライフ・インテグレーション：キャリア開発の一考察」

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部教授
中 村 艶 子



(総会の様子)

(講演会の様子)

講演会

名古屋フルブライトアソシエーション主催 2021年11月12日

(於 梶山女学園大学・オンライン講演会)

「ワークライフ・インテグレーション：キャリア開発の一考察」

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部教授

中 村 艷 子

名古屋フルブライトアソシエーション主催
於 梶山女学園大学 Zoom講演会 2021年11月12日（金）16:40～18:00
「ワークライフ・インテグレーション：
キャリア開発の一考察」
中 村 艳 子 (NAKAMURA, Tsuyako)
同志社大学グローバル・コミュニケーション学部教授

皆さんの夢は何ですか？将来をどのように考えていますか？英語を使って仕事がしたい？コロナ後には留学してみたい？誰かのキャリア形成を参考にして、自らの将来を思い描いてみませんか。目標に向けてモチベーションを高めましょう！このトークは、英語が大好きな学生がどのような学生生活を送り、San Diego, Monterey, Santa Barbara, Palo Alto(CA), Cambridge(MA)に留学し、米国での生活や仕事を通して夢を追いかけたかという話です。キャリア開発に加えて日本との違いや女性が働く状況、ワークライフ・インテグレーションという概念についても理解します。Zoomですから気軽に聞きに来て下さいね！質問・ご意見、大歓迎です。一緒に夢に向けて一歩を進めましょう！

梶山女学園大学生用の配布講演案内チラシ（中村作成）

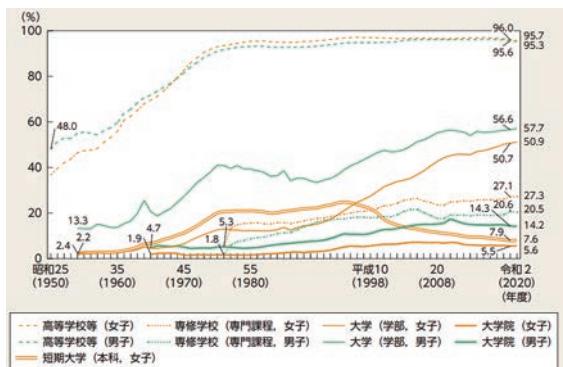
この度は、このような素晴らしい場で皆様とお目にかかることができて光栄に思います。名古屋フルブライトアソシエーション、ハワイ大学イースト・ウェストセンター同窓会の先生方、そして梶山女学園大学の皆様およびご関係の皆様に感謝申し上げます。特に名古屋フルブライトアソシエーション会長の塙田守先生と副会長の山本恵里子先生にはこのような機会を与えて頂いたことに感謝申し上げます。この場をお借りしてお礼申し上げます。

今回は、梶山女学園大学の学生さんたちを主眼において、「ワークライフ・インテグレーション：キャリア開発の一考察」と題し、私のこれまでの職業生活をとおしてみたキャリア形成についてお話しさせていただきます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

<キャリア形成の契機>

始まりは1970年代の南カリフォルニア・サンディエゴ(San Diego, CA)でした。高校2年生の夏休みにホームステイを経験し、ホストファミリーのマーフィー一家(The Murphy)との出会いが大きなきっかけでした。マーフィー家の父・母・3人の子供たちは皆、私に優しくオープンに接しアメリカの一般家庭の生活を体験させてくれました。日本ではまだ大きな冷蔵庫が珍しかった時代、マーフィー家には私の背よりも高い大きな冷蔵庫があり、そのうえプールまでありました。庭の手入れをする庭師もいて、父はその庭師とはスペイン語で会話をしていました。一人一台ずつの車を所有し、広大な5車線のハイウェイを豪快に走ります。全ての生活水準が当時の日本よりも高いレベルにありました。私は彼らから刺激を受け、将来は太平洋を越えて仕事をしたい！と考えるようになりました。

その後、修学旅行で香港・マカオにも行き、現地の学生たちと素晴らしい交流をするなど、高校時代のグローバルな経験を通じて、私の将来の夢は大きく膨らんでいきました。高校の進路相談では大好きな国語の先生に自分の将来について相談することにしました。当時は夢を抱きながらも、将来はどうすればよいか分からない状態で、先生には専門学校を考えている、と相談しました。当時は短大(2年制)に進学する人も多く、女性の四年制大学への進学率は低かったためです(図表1)。すると先生は、「英語を勉強したいのなら、4年制大学に行かせてもらひなさい」とご助言下さり、私は大学に行くことを決めました。



図表1 『男女共同参画白書 令和3年版』内閣府

*当時の女性の大学進学率：12.3% 2020年：50.9%

私の進路は四年制大学に特別推薦で決まり、その高校三年生の秋には小児科のクリニックでアルバイトを始めます。そこの院長先生に「将来何になりたいの」と問われ、「英語を使ってグローバルな仕事がしたい！」と答えました。しかし、「それは無理だよ」と言われてショックを受けます。英語は誰もが習うし、よほどできない限り英語を使って仕事をするのは難しい、とのことでした。(院長先生は正しかったと思います。)

院長先生はそのクリニックで働くことを勧めて下さり、他の従業員と同様、医療秘書の勉強をする通信教育の授業料と教科書代を負担して下さいました。そのクリニックには素敵な女性の社長さんや優しい先輩方がたくさんいらっしゃいました。まだ十代の私はそこで医療のみならず働くことについて多くを教えて頂きながら、京都の同志社女子大学に入学することになります（写真1）。



写真1 同志社女子大学栄光館 出所 <https://www.dwc.doshisha.ac.jp/admissions/dwcladays/board.html>

<同志社女子大学での生活>

専攻は英文学科でした。大学生になってもクリニックでの仕事と医療秘書講座は継続しながら英語で仕事をすることを考え、将来必要になるかもしれないタイピングのスキルを身に付けようと、週に1度学内でタイピングの講習を受けたり、夏休みに学外の集中講習を受けに行ったりしていました（当時はPCではなくタイプライターです！皆さんタイプライターは見たことがありますか？）。

大学2年の夏には再び渡米します。サンディエゴでのホームステイの経験があまりに素晴らしい、どうしても再訪したくて、夏休みに2ヵ月間サンディエゴ州立大学(San Diego State University)の英語集中コースに参加することにしたのです。レベル別にクラス分けされ、トップのクラスに振り分けられたのは良かったのですが、多くのクラスメートがヨーロッパ人のクラスは非常にレベルが高く、私は先生の講義が何も理解できず顔面蒼白になりました。講師の先生が“Are you all right?”と言って心配して下さるほど（笑）。私は自分のレベルの低さを痛感し、一層の研鑽を積もうと誓いました。

そこで帰国後、京都で通訳学校を見つけます。学生にとってはなかなかの授業料（現在なら年間60万円相当）でしたが、非常に素晴らしいカリキュラムで通訳技術を学べるため、アルバイト料を投資して放課後週2回、逐次通訳や同時通訳の技術を学び、大学を卒業するまで通い続けました。

そんなある日、大学内の書籍部で数少ない留学関連の書籍の中から『アメリカ留学最新情報』というベストセラーに巡り合います。ざっと目を通すと GPAについて書かれていました。当時 GPA という言葉は聞いたこともなく何も知りませんでした。(もちろん皆さんはご存じだと思います。“Grade Point Average”ですよね)。このページによると GPA が 4.0 に近ければ近いほど(つまり全て A であれば)良いということでした。至極当たり前のことですが、私はとてもショックを受けました。(勉強に身が入っていない当時の私には、恥ずかしながら C も多少あったのです。) いかに自分が怠惰で世間知らずであるかに気付き、この本をすぐに購入し、各ページにハイライトマーカーで線を引きながら、あたかも聖書のように熟読しました。留学するためには、英語の勉強はもちろん、GPA のスコアを向上させることが必須だと認識して勉強への専心を決意しました。それ以降はオール A を取得し、最終的には GPA を何とか 3.8 にすることができました。

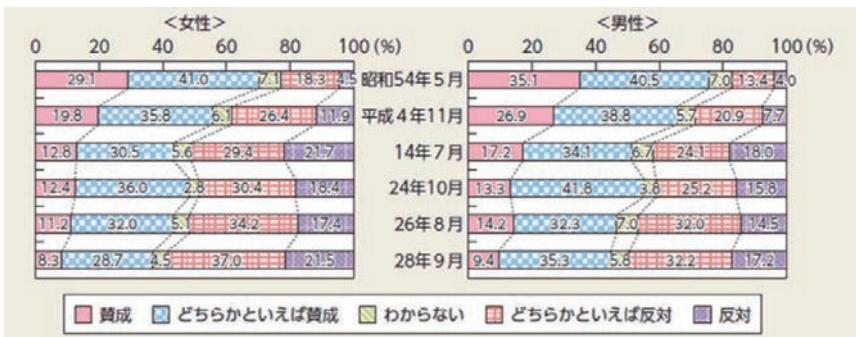
その後ゼミを選択し、当時は数少ない女性の教授の門下に入ることになります。恩師は英語教育のご専門で、異文化コミュニケーションのゼミを担当していました。憧れの先生のゼミは人気があって高い競争率でしたが、幸運にもゼミ生 20 人の 1 人として受講することができました。日々の生活では通訳学校に週 2 度夜間に通う一方で、クリニックで医療秘書検定 2 級免許(注射も打てる免許。打ったことはないですが...)を取得して受付や医療事務を週 3 回、家庭教師として小学生から高校生までを教え、土日には婚礼の巫女さんを務めたりするなど、アルバイトでフルタイム同等の仕事量をこなしていました。

大学生活中には京都国際会議場での国際会議をはじめ通訳の機会にも恵まれました。ゼミの恩師のご紹介による通訳もありました。先生がお住まいの京都府向日市がカリフォルニア州サラトガ市と姉妹提携を結ぶことになり、ゼミ生に打診があったのです。「異文化間コミュニケーション」というゼミですから、多くの手が挙がるだろうと期待していましたが、(と思いますが...) にもかかわらず、実際に手を挙げたのは 1 人だけでした。先生は不安な面持ちでしたが、私は通訳の勉強もしていたので「お任せ下さい！」とお伝えし、視察、交流、姉妹提携式典の通訳として精一杯務め、とても喜んでいただくことができました。

そんな中、自分の将来のキャリアについて考え始めました。女子大の就職課(キャリアセンター)に行ってみましたが、そこにはあまり公募情報がありませんでした。当時、日本にはまだ男女雇用機会均等法¹がなく、主流の仕事は男性が占め、女性の基幹職は限られていました。女子大なので情報が限られているのだろうかと思い、隣にある共学の同志社大学の就職課に行き、そこでショックを受けます。掲示されていた募集は、男子のみがほとんどだったのです！例えば、「営業男子 3 名」などという形で女性への募集はなく、あっても事務職がほとんどでした。当時、企業に募集要項の送付を頼んでも、女性には送らないところは多くありました。そういう時代でした。日本人のもつ概念とは、「夫が外で働き、妻は家庭を守る」というものでした(図表 2)。

¹ 男女雇用機会均等法は 1985 年制定、翌 1986 年に施行。後 1997 年に改正され、募集・採用、配置、昇進等も努力義務でなく、法的義務となる。

[男女の役割分業に関する意識の変化]



図表2 内閣府『平成29年男女共同参画白書』

これに対し教員の待遇は基本的に男女平等でした。親も教員を勧めていたこともあって、私は教職コースを受講していました。ただし、教職を取ると通常より多くの単位を取得する必要があるため、友人たちは忙しさから履修を中止していました。私はせっかくだからと継続し続け、夏の教員採用試験を受験するに至りました。一方で4年次最後の夏休みには文通をしていた友人を訪ねてヨーロッパを訪問する計画を立てていました。アメリカだけでなく、もっと他の世界も見てみたいと思ったのです。夏休み1ヶ月間を利用し、友人のいるイギリス、フランス、ポーランドに行くことにしました。夏休み前のオフピークにひと足早く出発すれば航空運賃は随分安くなるため、夏の教員採用試験を受けずに渡欧しようかと迷いましたが、一応最後まで教職を取った証に“記念”受験してから渡欧することにしました。

教員採用試験の一次試験は英語、国語、数学、社会、科学の5科目でかなり難しく、一緒に受験した友人は白紙で提出したなどと言っていました。私も結果には期待していませんでした。それで受験直後の翌日にはヨーロッパに飛び、丸一ヵ月、現地で充実した異文化交流をして帰国しました。すると予想外にも一次試験の合格通知が届いていたのです。（奇跡だと実感。）2次試験は専門の英語の筆記と英語面接でしたが、英検1級よりも高い難度でした。3次試験は（多少得意な）体力検定試験と面接で、幸運にも合格しました。（後に就職した職場の校長からトップで合格したと聞いて驚きました。）

<大学卒業後、高校教員に>

大学卒業後は滋賀県の高校の英語教師になりました。滋賀はアメリカ・ミシガン州の姉妹県です。そこでは当時、高校教師の交換プログラムがあったのですが、最低でも5年は働かなければなりません。私は当時22歳でしたので、5年後は27歳。留学したくてたまらず、「5年も待てない！」と思い、一刻も早く留学資金を貯めて留学しようと思っていました。

放課後は週1回、英会話サークル活動をしていました。高校教員を中心にレストランに集まり、食事をしながら英語だけで話すという誰でも自由に参加できるオープンな会です。ある日、そこに新しいメンバーとしてロータリー財団の会員がやってきます。その方はロータリー財団主催の地元の商工会議所とサンフランシスコのロータリー代表団との会議の通訳者を探していました。そして、この会で熱心に話している若い日系人（と思った）女性に「通訳を手伝ってくれませんか」と依頼します。（…彼が日系人だと思ったのは、実は、生まれも育ちも日本、の私でした（笑）。）私は学生時代に通訳学校に通って勉強していたこともあり、そのボランティア通訳を喜んで快諾しました。

ところが、毎日仕事に追われていた私は、不覚にも大切な会合の前日に熱を出します。しかし、会議に穴をあけるわけにはいきません。点滴を受けて仕事に臨み、当日は何か無事に任務を果たしました。その会議の司会者であった経済学の教授が私の仕事ぶりを褒めてくださり、会議直後、ご自宅でのパーティーにお招き下さりました。（本当は体調を崩していたので早く帰りたかったのですが…。）しかしせっかくのお招きでもありお伺いすることにした私は、そこで司会の教授と「初対面」のお話をすることになります。

<小さな奇跡が>

「中村さんは英語を頑張っているようですが、どのような経歴ですか。」そう尋ねられて、私は自己紹介をしました。すると、そのとき「神様の声」が響きました。

「中村さんは留学に興味がありますか。」

「もしよろしければ、ロータリー財団の奨学金に応募してみてはどうでしょう。」

「私があなたを推薦しますよ」…と。

そう、この初対面の先生こそがその5年前、私が19歳の時に毎日聖書のように読んだ、あのベストセラー『アメリカ最新留学情報』の著者だったのです！その先生は「留学の神様」という異名をもつロータリー財団の国際カウンセラーでした。こうして私の切実な留学への夢は、この小さな奇跡によって動き出すことになりました。

しかし、私はアメリカの大学で勉強する自信がなく、大学の3年次に編入することが可能かどうかを尋ねました。すると、その先生は「大学を卒業しているなら大学院にいけばいい、TOEFLのスコアはどうなの？」とお尋ねになりました。当時、私はTOEFLを受けたことがなく、TOEFLを知っている人自体少ないものでした。大学院は考えてもみませんでしたが、大学院への出願を決めました。締め切り前に1度だけ機会があったTOEFLを初受験しました。通訳者になるための大学院の留学基準は最高レベルのTOEFLスコアが必要です。四択問題に全身全霊で勘を働かせて(?)回答し、何とか応募基準をクリアしました。

肝心のロータリー財団の試験は京都、奈良、福井、滋賀で構成される2650地区の選抜で、かなりの競争率でした。会場のフロアは受験者で溢れ、無理かもしれない…と思いました。

その年は書類選考に加えて英語・日本語の面接があり、8名程度しか選ばれません。

しかし、奇跡的に合格し、渡米のチケットを得られたのです。留学の出願には TOEFL 以外にも GRE、成績証明書、志望動機書、推薦状などが必要でロータリー財団では 5 校に出願するよう指定されていました。しかし当時は web 出願などなく、出願書類を郵便で取り寄せて提出するという手続きでした。大きな大学は取り寄せにかなりの時間を要し（半年近くかかるところもあり）、結局私は、フロリダ州立大学（Florida State University）とモントレー国際大学院（Monterey Institute of International Studies）の 2 校のみに応募して、幸運にも両方から合格通知をいただきました。

フロリダ州立大学は大きな研究大学で TA（ティーチング・アシスタント）に応募したところ授業料が免除になるとのことでした。一方、モントレー国際大学院は小規模大学院ながら質は高く、唯一通訳・翻訳の修士号を取得できる大学院です。ただ私学のため授業料が非常に高く、TA 制度も寮もないというネックがありました。私はその二つのうち、モントレー国際大学院を選択しました。理由は想像に難くありません。通訳の勉強ができるで学位を得られるのは他ならぬモントレー国際大学院だったからです。そのような経緯で国際ロータリー財団の奨学生としてモントレー国際大学院に行くことになります。高校時代から夢に見続けてきた長期留学の夢は、このような不思議な奇跡によってもたらされたのでした。

<夢叶うアメリカ生活>

モントレーはカリフォルニア州の元州都で、全米屈指の退職者たちが住みたい風光明媚な街の一つです。そこにあるモントレー国際大学院（MIIS: 現 Middlebury Institute of International Studies at Monterey : 写真 2）は優秀な学生を輩出しています。たとえば、ハリーポッターシリーズの翻訳者は私の指導教授の会議通訳仲間で、ここで学位を取得されました。その他、有名な人たちが同窓にはいらっしゃいます。私はそこで大変有意義な留学生活を送りました。

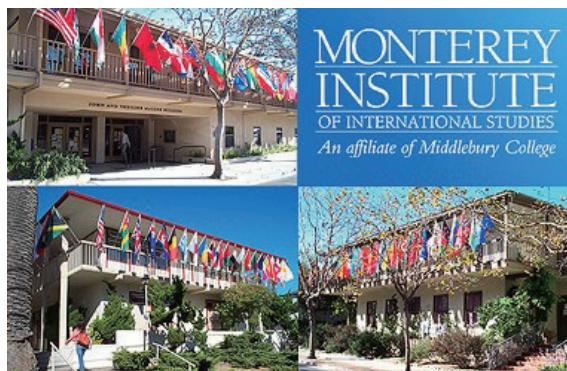
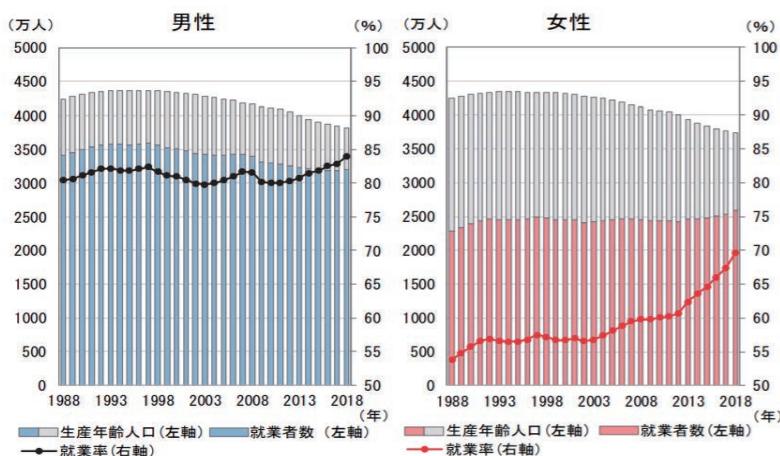


写真 2 Source: Monterey Institute of International Studies

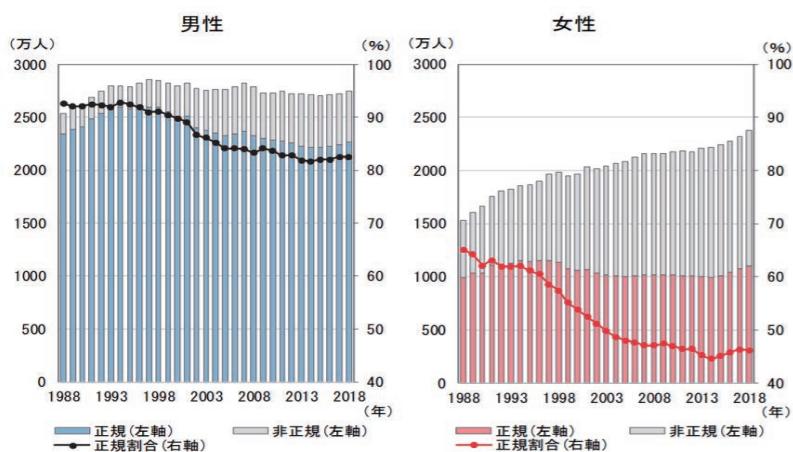
初めての長期留学生活は夢のようで、厳しい授業に加えていくつかの仕事も経験しました。オンキャンパスの英語関連の仕事に加えて最も印象的だったのは、夏休みに従事したホテルの総支配人のバイリンガル秘書でした。その採用試験には何段階かありました。

まず、書類審査に続き人事部長との面談がありました。面接に登場したのは美しいエレガントな女性でした。「人事部長」が女性だということにまず驚きました。(今は普通でも)当時の日本では管理職はほぼ男性で、女性管理職は極めて稀だったからです。日本では1988年時点では女性の就業率は低く(図表3)、管理職の母数も少なかったのです(図表4)。

[男女別にみた日本の就業者数・就業率の推移]



[男女別の正規、非正規雇用者数および正規雇用割合の推移]



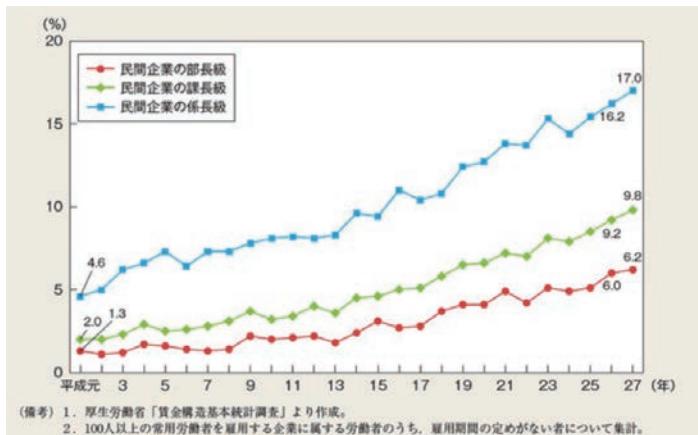
図表3 2019『経済のプリズム 働く女性の現状と課題~女性活躍の推進から考える~』

出所 https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/keizai_prism/backnumber/h31pdf/201918102.pdf

女性就業の量的拡大に貢献していたのは主に非正規雇用者の増加も一因である。ただし女性の正規雇用者も、最近の 2013~2018 年の期間では、989 万人→1,098 万人へと増加している

バイリンガル秘書のテストにはタイピングもあり、どうしてもそこで働きたかった私は全力でタイプし、人事部長からは「こんなに速く打てる人見たことないわ」と言われました。大学在学中のタイピングコース受講が功を奏したようです（笑）。

[階級別役職者に占める女性の割合の推移]



図表 4 内閣府『平成 28 年男女共同参画白書』

次に総支配人秘書との英語面接と総支配人との面接がありました。和やかな雰囲気のうちにうまく進みました。最後は本当に日本語ができるかどうかを確認するために、日本人の営業部長との簡単な日本語面接を受けました。（その方も女性でやはり驚きました。）また、レファレンスとして私の大学院の教授への問い合わせもなされたようで（これにも驚きましたが）問題ないと確認されて無事に採用されることになります。採用後はアメリカでの異文化職業体験で楽しく有意義な時を過ごしました。

ホテルでのインターンシップでは 2 つのカルチャーショックを受けました。一つは新人研修でした。担当の部長は皆に向かって「君のキャリアゴールは何？なぜこのホテルを選んだのか」と問い合わせました。日本では終身雇用ですので「骨を埋めるまでここで働きたいです」というのが一般回答かと考えました。しかし、アメリカでは違っていました。研修を受けていたアメリカ人従業員たちは皆、口々に「ここを踏み台にしてキャリアアップを図って、もっと上（別の場所）に行きます」と答えたのです！そんなことを明言するなんて、かなり大きなカルチャーショックでした。しかし、それがアメリカのジョブ型雇用の特徴なのです（補足 1）。

* 日本型雇用システムの特徴

長期雇用慣行・年功賃金制度・企業別組合(三種の神器)←「職務の定めのない雇用契約」

* ジョブ型雇用

あらかじめ職務内容が決まっており、仕事内容は専門的で業務範囲は限定的、賃金も先に決まっている。そのためスキルアップのため転職しやすい。(補足 1)

濱口桂一朗『日本の雇用と労働法』日経文庫、2014 年、16~28 頁。

もう一つのカルチャーショックは秘書業務の慣行でした。日本では上司やお客様にお茶を出すことが仕事の一部として当然視されていたので、そうしようと総支配人にコーヒーをお出ししました。すると、「艶子、それは君の仕事じゃない、そんなことしなくていいですよ」と言われたのです。またもや日本とのギャップにカルチャーショックを受けました。そこでのバイリンガル秘書の仕事内容は、全てのアンケートに目を通し、PC に入力して、総支配人の手紙を作成してお客様に返事をすることや翻訳などでした。英語表現も含めてわからないことについて質問攻めにする私に対して、周囲の方々はいつも気軽に親切に応えて下さいました。そのような異文化の中で日々さまざまなお客様の要望を学び、新しいことを学んでいくことに大きな喜びや、やりがいを感じました。

そのようなある日、査定(業績評価)が行われたのですが、思いがけず全ての項目で満点という成績評価を受け、感激し涙しました。周囲の方々に教えて頂きながら頑張ったことが評価されたんですね。この最高の職場では、インターンシップ後も誕生日に職場に内緒で呼び出され、アメリカ式の思いがけないサプライズ!でお祝いまでして下さいました。(バースデーケーキと英語のスラング辞書を同僚の皆さんからプレゼントして頂きました!)本当に幸せな職業体験だったと今も感謝の気持ちで一杯です。

<モントレー国際大学院翻訳・通訳研究科卒業後>

モントレー国際大学院の翻訳・通訳研究科(T&I)は課題が多く、私は毎日 4 時間の睡眠時間でコースワークを何とかこなして学位(翻訳修士)を取得しました。将来のキャリアを考えたときに、通訳以外のスキルをもたずにアメリカでポジションを見つけることは非常に困難でした。そのことを総支配人に相談したところ、ハワイのリゾートホテルの日本担当サービス課のマネージャーとして採用してくださることになりました。

マネージャーとして採用された当時(1990 年) → (2018 年)

アメリカ女性管理職比率 28% → 51.5%

日本女性管理職比率 1.8% → 14.8%



写真3 Sheraton Moana Surfrider Hotel (現 Westin Moana Surfrider Hotel)

筆者撮影

そのリゾートホテルはワイキキの中央に位置する大変由緒ある歴史的ホテルで、多くの有名人も宿泊し、日本人観光客（特にハネムーナー）には人気のあるホテルでした（写真3）。そこではホテル経営、顧客対応や日米間の異文化摩擦時期の人間関係を学ぶことができました。湾岸戦争も勃発し解雇される人員も少なくない中で、働き続けることができて大変ありがとうございました。また、通訳や翻訳の経験を積むこともできました。

しかし長期のキャリアを考えたときには、やはり会議通訳者としてのスキルを磨いて勉強したいと考えて、帰国を決意しました。辞意をお伝えすると、もっと上のポジションのオファーもいただき、望むなら、とチェーンホテルへの異動も考慮して下さいました。アメリカに留まるか、日本に帰国するか、いくら考えても明確な答えはなく、非常に難しい判断でした。辞職時には総支配人から次の仕事用にと温かいお言葉に満ちた推薦状を頂きました。大変ありがとうございました。職場の同僚の皆さんからはアロハスピリットに満ちたサプライズのお別れ会をして頂き、ハワイの美しいレイとコアの木の宝石箱をプレゼントして頂きました。短い間でしたが、数えきれないほどの貴重な経験と思い出を頂きました。感謝の気持ちで一杯です。

4年間滞在したアメリカに別れを告げ、帰国してすぐに指導教授にご挨拶に伺いました。すると、思いがけず母校（同志社女子大学）での嘱託（非常勤）講師のポジションを勧めて下さいました。またその一方で、設置されたばかりの同志社大学アメリカ研究科博士後期課程に入学しました。さらに夜間には通訳学校にも通い、通訳技術を磨き直しながら通訳に従事し、ほかにも企業内翻訳、英会話講師、家庭教師などをし、これらすべてを同時進行で行う生活を送りました。

その後、アメリカの大学院で系統的に研究したいと思い、フルブライト大学院プログラムに応募しました。合格を頂いたのですが、現地大学院の受入れがうまくいかず（「満席なので次年度なら入学可」という通知で）やむを得ずその奨学金を辞退する結果となりました。

奨学金の応募規定には「30歳以下」という年齢制限があったため、それが最初で最後のチャンスでした。そのため残念でしたが、翌年、大学の協定大学であるカリフォルニア大学の派遣留学に応募して University of California, Santa Barbara (UCSB : 写真4) の社会学研究科に授業料免除と日本国際教育協会（現 JASSO）の奨学金で留学させて頂きました。



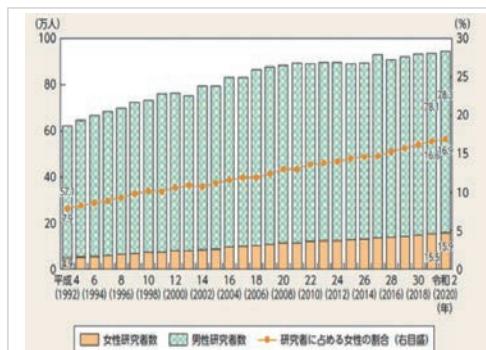
写真4 Source: UCSB HP <http://www.ucsb.edu>

当時は大学ランキングについては気にも留めていませんでしたが、後に UCSB のジェンダー研究が全米ランキング 2 位 (2009 年時点) だと知ります。(UCSB のある先生は実際にはトップだと思うと学会で誇らしくおっしゃっていました。) 確かに教授陣は社会学でトップクラスの研究者ばかりで、充実した研究環境の中で実際に多くを学ぶことができました。

アメリカの大学院の勉強量は尋常ではありませんでした。授業でのディスカッションでは皆、早口で聞き取りも難しい上に、こちらの意見を言うタイミングを計るのは容易ではありません。そのディスカッションのベースとなる課題では 1 科目で毎週 1 冊か論文を数本読みます。3 科目履修していれば毎週 3 冊程度を、5 科目なら 5 冊程度を読んでいくことになります。私は既に通訳者ではありましたが、社会学の専門用語や概念は新しいものばかりで、必死にフォローする必要がありました。髪が抜けたり、(歯を食いしばって勉強したため) 歯が溶けたりするほどでした。しかし研究が興味深く意義のあるものだと再認識し研究に没頭できたこの時期は非常に有益な時間でした。現地調査で「ファミリーフレンドリー」を知り、日本で初めて発表することになります。(この「ファミリーフレンドリー」の概念が後の「ワーク・ライフ・バランス」へと発展しました。)

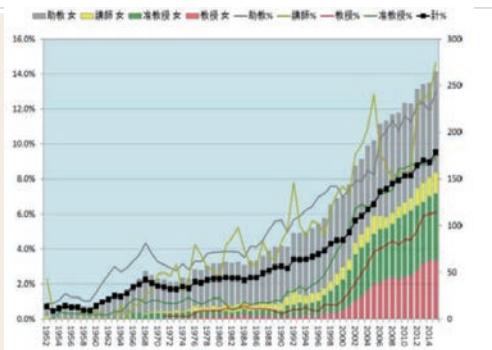
この留学をとおして研究に開眼し、日米の女性労働に一層関心を強め、大学教員としてキャリアを積みたいという想いを強くしました。しかしながら、フルタイムでの採用は競争が激しいだけでなく、私が応募できる分野（女性労働か通訳）では当時はいずれも募集がありませんでした。女性教員の割合は低く（図表5、図表6）、年齢の壁を感じました。私は長いトンネルの中にいるかのような気持ちになりました。

[女性研究者の推移]



図表5 『令和3年男女共同参画白書
女性研究者数及び研究者に占める女性の割合』

[正規女性大学教員と比率の推移]



図表6 「京都大学男女共同参画推進に関する意識・実態調査」2016年
出所 https://www.kyoto-u.ac.jp/contentarea/ja/about/gender_equality/documents/chosa_27.pdf

1992年 女性研究者 4.9% 男性 57.1%(全体割合 7.9%)

2020年 15.9% 78.3%(全体割合 16.9%)

(備考) 人文・社会科学、自然科学すべての分野を含める

研究者の所属は主に大学であるが、公的機関、企業・非営利団体も含む

しかしながら、結局、研究業績をもっと積むことが必要だと認識しました。そうして、論文執筆や学会報告に専心します。また、1999年には当時所属していたアメリカ学会からアメリカ研究財団の研究助成金を得てハワイ大学イースト・ウェスト・センター(East-West Center)の CAPE(the Center for Asia-Pacific Exchange)のアメリカ研究夏期研修(American Study Summer Program)に参加させて頂きました。それは元職場のあるホノルルでの研修で、講師はアメリカへ帰国された同志社大学アメリカ研究科時代の最初のアドバイザーでした。今思うとそれは良い前兆だったようです。その翌年、幸運にも同志社大学言語文化教育研究センター(現・グローバル・コミュニケーション学部)に採用されました(写真5)。

それ以来、研究、教育、社会活動に専心してきました。時代の波と同調しながら、日本の女性雇用や保育所問題などのグローバルな発信と課題追求が重要だと考えています。米国議会議事堂やマンスフィールド財団、女性政策の視察団(写真6,7)をはじめ、国内外でさまざまな講演や報告の機会を頂き、在外研究ではフルブライト客員研究員としてスタンフォード大学とハーバード大学で研究する好機を授かりました(写真8)。感謝の気持ちで一杯です。現在はメンターに恵まれ、ワークライフ・インテグレーション、ダイバーシティと女性雇用政策について研究を進めており、研究成果を社会還元していくことが目標です(写真9, 10)。本日はこのようなお話をさせて頂く貴重な機会を頂き、感謝申し上げます。お忙しい中ご参集下さった皆様には心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

同志社大学京田辺キャンパス正門

同志社大学言語文化教育研究センター（当時）

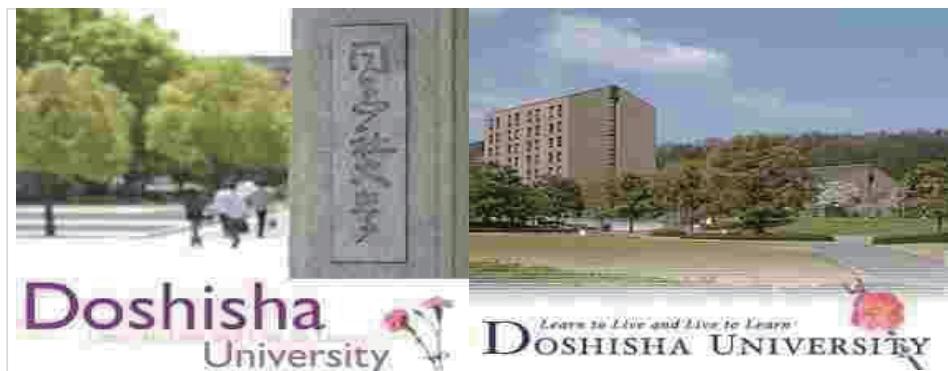


写真5 同志社大学京田辺キャンパス 出所 <http://www.doshisha.ac.jp/information/fun/photo/>

米国視察・シンポジウムの模様
(2005年7月、於 ミネソタ州)
女性政策に携わる影響力のある日本女性代表団として



元米国副大統領・在日米国大使ウォルター・モンデール氏オフィスにて
http://www.mansfieldfdn.org/programs/wipps2_gallery.htm

米国視察・シンポジウムの模様
(2005年7月、於 ワシントンDC)



http://www.us.emb-japan.go.jp/jicc/EJN_no2.htm

写真6 日本代表団として訪米（2005年）

ウォルター・モンデール元副大統領のオフィスおよび首都ワシントンでのシンポジウム

写真7 日本代表団として訪米（2005年7月）

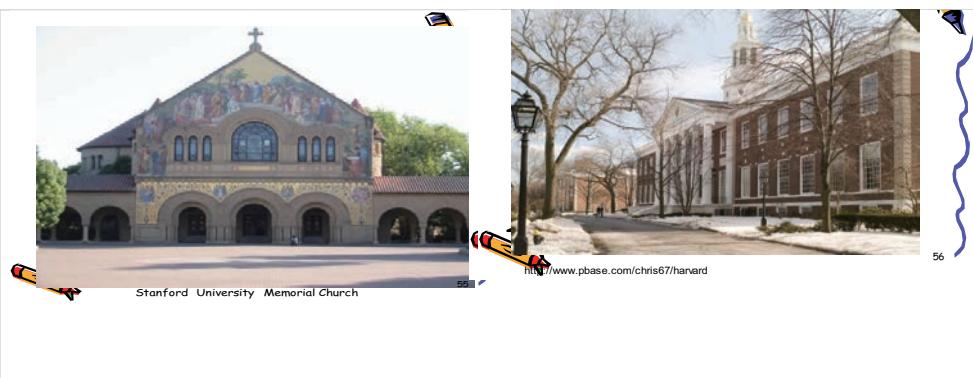


写真8 Stanford University and Harvard University

TOMODACHI イニシアチブ(米日カウンシル・東京米国大使館
主催)TOMODACHI MetLife Women's Leadership Program
第一期(2013年度)メンター・シャベロン



TOMODACHI MetLife Women's Leadership Program Conference at Teikoku Hotel in Tokyo
With presence of Ambassador Caroline Kennedy

Black Month Celebration at the Estate of Consul General Karen Kelley March 2018



写真9 ケネディ大使を囲む TMWLP メンター集合写真

写真10 Black Month Celebration 米国総領事との会談

講演後、帽山女学園大学の学生さんたちからいただいたコメント（コメントありがとうございました！）

「out of your current comfort zone を抜け出すことが、自分の殻を破ることに繋がることに気付きました。目の前の課題に誠実に取り組み、夢に向かってこれからも努力を続けたいと思います。ありがとうございました。」

「講演を聞いて、願っていればチャンスは訪れるのだと思いました。私はコロナで留学のチャンスを逃してしまったのですが、その夢がまだ諦められずにいます。そんな状況で今回の講演を聞いたので、とてもモチベーションが上がりました。諦めずに、留学の夢を達成できるよう頑張ります！今回は貴重な機会を頂き、ありがとうございました。」

「「英語が好き」という軸を持ち、幅広く行動なされた中村さんのバイタリティと目標達成能力に感服しました。私も社会人として頑張っていきたいです。」

「女性のライフプラン、キャリアプランとしてとても刺激的な意見をお聞きすることができました。私のこれまでの考えでは、安定性や周りと逸脱しないことに囚われてしまいがちでした。しかし、中村さんの、挑戦される姿や自分自身が望む景色を見るために新しい道を進む姿に感銘を受けました。特に、先進国であるアメリカで培われた価値観が、当時は少数派であった女性の社会進出の面へ貢献されていることが分かりました。来年度から社会人として働く身として、私も誰かのライフモデルになれる存在を目指して、自分らしさを大切に勉学や業務に励みたいと思いました。」

「今回の講演を通して挑戦する事の大切さをより学びました。中村先生の時代に男女雇用機会均等法が整っていない中でもめげずに職場で男性に負けず自分のスキルを発揮して地位を確立していくとてもかっこいいなと感じました。私も就職先で同僚に負けず先輩を超える勢いで働く事でより性別関係なく働ける世の中にしていくないと感じました。」

「中村先生の貴重なお話ありがとうございました。巡ってきたチャンスは必ず逃さないという先生の姿勢に力強さを感じました。今回のお話は私にとっていい刺激になりました。お忙しい中ありがとうございました。」

「中村先生、先日はとてもためになるようなお話をしてくださいありがとうございました。中村先生の物事を前向きに捉える力、笑顔で楽しく話されている姿に勇気をもらいました。私はコロナ禍で英語に対する邁進力、私生活にモチベーションがありませんでした。しかし、中村先生のお話を聞いてもう一度頑張ってみようと思うことができました。貴重なお話をありがとうございました。これから的生活に生かしていきたいと思います。」

3. 会務報告

名古屋フルブライト・アソシエーション 2021 年度総会 2021 年 11 月 12 日

報告

1. The Fulbrighter in Nagoya No. 30 の発行
2. 会員の数 69 名、2020 年度会費支払い人数=25 名（名古屋古ブライトアソシエーション）イーストウェストセンター中部同友会 22 名、2020 年度会費支払い人数=8 名、

議題

1. 2020 年度（2020 年 4 月—2021 年 3 月）の事業報告
 2. 2020 年度の決算報告と監査
 3. 2021 年度の事業計画、予算案
 4. 山本恵里子さんのプロジェクト案
 5. その他
1. 2020 年度（2019 年 4 月—2020 年 3 月）の事業報告

開催日程 2020 年 11 月 20 日（土）

Zoom による開催日程 2020 年 11 月 1 日（日）

総会：午後 1：00～2：00

講演会：午後 2：15～3：30

懇親会：午後 3：45～4：30

講演会講師の紹介

山中美湖様、同志社大学アメリカ研究所、助教
2011 年フルブライト大学院奨学生、

2. 2020 年度の決算報告と監査

別紙 1 を参照

3. 2021 年度の事業計画、予算案

別紙 2 を参照

別紙 1

名古屋フルブライト・アソシエーション

2020年度決済

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
補填 会費 会費	7,934 75,000 8000	事務局長 3000X25 1000X8	総会案内(76人) 2020年10月 総合案内(27人) イーストウェストセンター サーバー・ドメイン The Fulbrighter in Nagoya no.30 (5冊) 33X110(振り込み郵便費用)	21,842 11,852 38,610 10,000 3,630	
		講演会謝金		5,000	
計	90,934			90,934	

2020年度収支決済についき、領収書、預金通帳等関係書類によって監査を行った結果、適正である事を認め、ここに報告します。

2021年11月12日

小坂敦子

監事

名古屋フルブライト・アソシエーション

2021年度

事業計画案

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
会費	90,000	3000×30	総会案内(76人)	21,528	
会費	6000	1000×6	総合案内(26人)	11,712	
			通信費	3,390	
			サーバー・ドメイン	38,610	
			The Fulbrighter in Nagoya no.30 (5冊)	10,000	
			相山女子学園	1,800	
			振替え手数料 (110×36)	3,960	
			講演会謝金	5,000	
計	96,000			96,000	

名古屋フルブライト・アソシエーション会則

制定 1983年10月 1日

改正 1993年 6月 5日、2009年 5月30日、**2012年10月14日**

第1章 総則

第1条 本会は、名古屋フルブライト・アソシエーションと称し、英文を Nagoya Fulbright Association と称する。

第2条 本会は事務所を名古屋に置く。

第3条 本会は、会員相互の親睦を図り、会員の経験、情報をもとに、より一層の啓発を図り、日米親善および相互理解を増進することを目的とする。

第4条 本会の会員は、正会員、準会員、賛助会員、名誉会員、シニア会員とする。

第5条 1. 正会員：ガリオア・フルブライト奨学金のグランティー

2. 準会員：フルブライト奨学金のグランティーで日本に滞在しているアメリカ人

3. 賛助会員：本会の目的に賛同し、役員会の承認を得た者

4. 名誉会員：正会員のうち、本会に特別の貢献をし、役員会の承認を得た者

5. シニア会員：正会員のうち、本人の申し出があり、役員会の承認を得た者

第2章 事業

第6条 本会は次の事業を行う。

1. 会員相互の交流、親睦を深めるための活動

2. フルブライトその他の奨学金を受けて渡米するグランティーへの指導、援助

3. 日本に滞在するフルブライトグランティーの研究活動 および滞在中の生活への
指導援助

4. その他日米相互理解を深めるための活動および役員会で必要と認めた事業

第3章 総会

第7条 総会は毎年1回開催する。その他役員会で必要と認めた時には、臨時総会を開催する
ことができる。

第8条 総会では、次の事項を行う。

1. 事業報告、収支予算、決算の承認

2. 役員の選出

3. その他の本会運営のための重要事項の議決

第9条 議決は出席正会員の過半数をもって成立する。

第4章 役員

第10条 本会には、会長1名、副会長若干名、幹事若干名、監事を置く。

第11条 任期は2年とし、役員の再選を妨げない。

第5章 会計

第12条 本会の運営資金は、会費および寄付その他の諸収入をもって、これにあてる。

第13条 正会員の年会費は 3,000円とする。

名誉会員およびシニア会員のうち申し出があった者は、年会費を免除される。

賛助会員（法人）は1口 年 10,000円とする。

賛助会員（個人）の年会費は 3,000円とする。ネットによる連絡を希望する場合には 終身会費
10,000円とする。

第14条 本会の会計年度は 4月 1日に始まり、翌年 3月 31日に終わる。

役員（2021年～2022年度）

会長・事務局

塚田 守（帽山女学園大学国際コミュニケーション学部 教授 1981-83）

副会長

木下 徹（名古屋大学大学院人文研究科 教授 1989-91）

山本恵里子（在野研究者 1998 元帽山女学園大学教授）

幹事

伊原 正（鈴鹿医療科学大学 教授 1985-1990）

加瀬豊司（四国学院大学 名誉教授 1974-76）

川島正樹（南山大学外国語学部 教授 1995-1996）

藤本 博（元南山大学教授 1977-80）

星野靖雄（筑波大学 名誉教授 1981-82, 1990-91）

Marc Bremer（南山大学経営学部 教授）

監事

小坂敦子（愛知大学法学部・国際コミュニケーション研究科 准教授 1986）

地村みゆき（愛知大学経営学部 助教 2011-2012）

発行年月 令和4年2月15日

発行 名古屋フルブライト・アソシエーション

〒464-8666 名古屋市千種区星が丘元町17-3

帽山女学園大学国際コミュニケーション学部塚田研究室

電話：052-781-5143

Email: mamoru@sugiyama-u.ac.jp

URL: <http://fbandewc-nagoya.jp/fb/>

印刷 ツグ印刷株式会社 電話：052-621-2716

